



広報

すこやかさん

東京都教育相談センター

http://www.e-sodan.metro.tokyo.jp

〒169-0074 東京都新宿区北新宿 4-6-1
(東京都子供家庭総合センター 4階)
TEL 03-3360-4181 FAX 03-3360-4198

第36号
平成26年12月発行



◆子供の姿を成長プロセスから見つめ直して

■「今」から「背景」に思い巡らせ

～東京都教育相談センターの成り立ち～

東京都教育相談センターの前身である都立教育研究所は昭和29年に設置され、4年後に分室にて教育相談を開始しました。設置から47年後の平成13年、組織改正により、都立教育研究所、都立多摩教育研究所の相談部門を発展的に統合し、総合的な東京都の教育相談機関として、東京都教育相談センターが開設され現在に至ります。

この60年の間で急速に進んだ経済・社会のグローバル化、情報化など、時代の変化とともに相談内容も多様になっています。時代により相談内容や件数に違いはありますが、不登校や集団不適應など相談開始当時から変わらずに多い相談もあります。

当センターとしては、開設当初から以下の基本姿勢を大切に相談をお受けしています。

相談を受ける基本姿勢は、相談者がなぜ「今」相談しようと思ったかを考え、相談者の「今」に焦点を当てて傾聴することです。

傾聴しながら相談者の気持ちを受け止め、状況を整理し、具体的な対応を考えていく過程で、「今」から「背景」が見えてくることもあります。そして、「背景」を理解することで、相談者の「今」のことがより鮮明に見えることもあり、解決の糸口が見つかることもあります。

■今後の教育現場に求められるもの

～子供の成長プロセスを活かした生徒指導～

昨今の児童・生徒の様々な問題行動を考えると、より一層人間性豊かな成長を目指す教育の大切さを改めて考えさせられます。

子供の発達は「乳児期」・「幼児期」・「学童期」・「青年期前期」と各段階を経て成長していきますが、**まっすぐに一直線に成長していくわけではありません。**ときには「足踏み」や「後戻り」しながら、周囲に助けられて発達課題をクリアして成長していきます。しかし、発達課題をクリアしないと、身体的には成長していても、心理的にはつまづいた発達段階にとどまってしまうことが考えられます。

児童・生徒の「今」の様子を見て何か気になる場合、今号の「**子供の姿を成長プロセスから見つめ直して**」を参考に対応を検討してはいかがでしょうか。気になることの要因となる「背景」が見えてくるかもしれません。

学校だけで児童・生徒を支えることが難しい場合は、外部機関と連携していくことで、社会全体で児童・生徒の生涯に通じる豊かな人間的成長を支えることができます。

児童・生徒の様々な問題の「未然防止」「早期発見」「早期対応」ができる場である学校で、日々児童・生徒に接している教員が、子供の成長プロセスを把握しておくことは重要なことです。

《参考》

生徒指導の一環としての教育相談について、平成22年文部科学省が発行した『生徒指導提要』では以下のように記しています。

- 「教育相談は、児童生徒それぞれの発達に即して、好ましい人間関係を育て、生活によく適応させ、自己理解を深めさせ、人格の成長への援助を図るもの」
- 「生徒指導は、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」
- 「教育相談は主に個に焦点を当て、面接や演習を通して個の内面の変容を図ろうとする」
- 「生徒指導は主に集団に焦点を当て、行事や特別活動などにおいて、集団としての成果や変容を目指し、結果として個の変容に至る」

このように教育相談と生徒指導は重なるところも多くありますが、教育相談は、生徒指導の一環として位置付けられるものであり、その中心的な役割を担うものといえます。

教員は学校教育活動において、教育相談と生徒指導を同時に実践し、児童・生徒の理解を図っているのです。

用語の説明

愛着	出生直後から見られる、母などの主な養育者と子供の間の絆。表情やしぐさなどの子供からの発信に大人が適切に応答すると、安定した情緒的関係が成立し基本的信頼感が生まれる。
基本的信頼感	乳児が、養育者から愛情深く世話をされ、愛されている実感を得ることで育つ自分自身や他者への信頼。
基本的不信感	乳児は、自分の欲求がいつもすぐに満たされるわけではないと、自分を取り巻く世界に不信感を抱く。基本的不信感が基本的信頼感を上回ってしまうと、子供は他者を潜在的な敵と感じ信用できなくなる。
自律性	自分の意志で自分をコントロールすること。トイレトレーニングをやり遂げ、排泄欲求を上手にコントロールできるようになることは、自律性を身に付ける人生で最初の機会。
恥・疑惑	トイレトレーニング中の失敗を強く叱られたり、褒められることなく注意されてばかりだと、自分を恥じる気持ちが強くなり、自分の能力に疑惑を持つ。
積極性	子供が「あれもしたい、これもしたい」と自分で考えて行動しようとする姿勢。
罪悪感	自発的に行動した結果うまくいかなかったり、叱責ばかりされた時に生じる、「自分は重大な罪を犯してしまった」と自分を責める感情。
トイレトレーニング	幼児期前期の大きな課題。おおむね2～3歳頃の、適切な時と場所で排泄するという排泄をコントロールする訓練のことをいう。失敗を通して身に付いていくもので、うまくいくと自分の身体を自分のものと実感し、自分で自分をコントロールする自制心が生まれる。しかし、強く叱られ過ぎたりすると自分を恥ずかしく思ったり、「自分で自分を統制できないんだ」と自己に対して疑惑が募る。
第一反抗期	2～3歳頃、子供が自分の意志をもち始め大人の干渉から逃れようとする。大人の言うことを拒否したり悪いことをしても謝らないようになったりする。このような反抗的行動が活発な時期をいう。
自己効力感	ある課題について、「自分はここまで達成できる」という予測に基づく自分に対する信頼感。
勤勉性	自ら課題に立ち向かい完成させようとする姿勢。
劣等感	自分が他者よりも劣っていると思いつい込む自信のない感情。必ずしも現実を反映しているわけではなく、主観的な思い込みとも言える。
ギャングエイジ	学童期中期頃、同性で5～6人の仲良し集団を構成する。閉鎖性が強く、自分たちだけに通用するルールや隠語を作り、仲間以外の子供は集団に参加できない。この集団を構成しやすい年齢をいう。
第二次的徴	思春期以降に明瞭になる男女の身体的特徴。男性では、肩幅の広がり、筋肉やひげなど体毛の発達、声変わりなど。女性では、乳房や皮下脂肪の発達、腰幅の広がりなど。
自我同一性の確立	「自分には何ができるのか」「自分の目指す道は何か」など社会の中における自分自身の位置付けについて、肯定的な答えを見出すこと。
自我同一性の拡散	社会の中における自分自身の位置付けについて混乱し、自分を見失うこと。
第二反抗期	身体の急激な発育と第二次的徴を迎えて、子供が大人の世話をうろさがったり干渉に反発したり、社会の権威に反抗すること。社会性の発達にとって意義のある時期。
心理的離乳	心理的に親への依存から独立すること。親への反抗、葛藤を伴うので一時的に親子関係が不安定になることもあるが、これを通して子供は親との最適な心理的距離を見出し自立していく。

参考文献：「心理学辞典」有斐閣、「心理学辞典」誠信書房、「教育相談辞典」金子書房、「学校教育相談 カウンセリング辞典」教育出版

今年度「教職員等からの相談」専用電話を開設しました

03 - 3360 - 4160 平日：午前9時から午後5時まで

- 幼児・児童・生徒の理解や対応などでお困りのこと、校内の教育相談体制づくりや当センター事業の活用に関することなど、お気軽に御相談ください。
- 必要に応じて学校を訪問し、御相談を伺うこともできます。

【お問い合わせ】 東京都教育相談センター

所在地 〒169-0074 東京都新宿区北新宿 4-6-1

東京都子供家庭総合センター 4階

電話 03 (3360) 4181 ファクシミリ 03 (3360) 4198

ホームページ <http://www.e-sodan.metro.tokyo.jp>

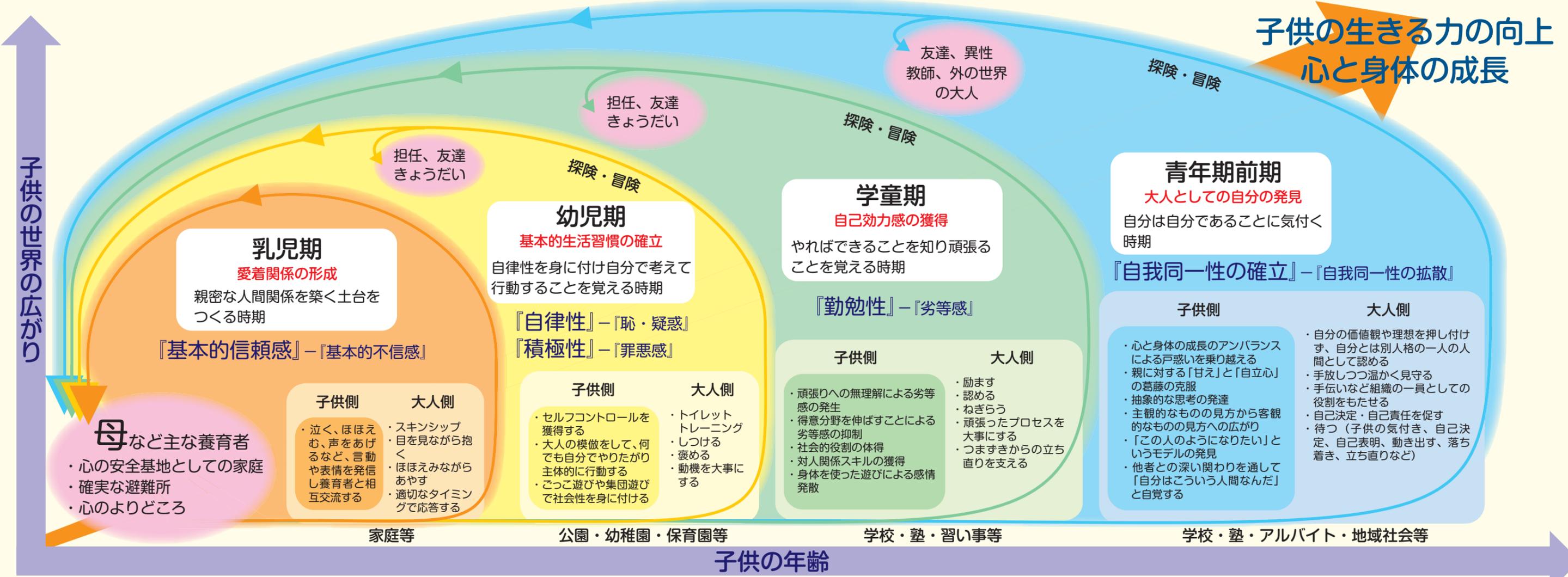


この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

子供の姿を成長プロセスから見つめ直して

子供の発達は直線ではなく、各段階をらせん状に進んでいきます。ときには「足踏み」や「後戻り」しながら、発達課題をクリアして次の段階に進みます。子供は、信頼関係が築かれた「母など主な養育者」を支えに探検・冒険に出て、次第に世界を広げていきますが、未知なこと、怖いものに出会うたび「母など主な養育者」の元に逃げ帰って慰められ、勇気をもってまた外の世界に出掛けていきます。

子供が園や学校に行くようになると、すぐに「母など主な養育者」の元に逃げ帰るわけにはいきませんが、その代わりに**教員等との間に信頼関係を築いて、乗り切っていきます**。成長しても「母など主な養育者」の声を聞いたり、心のよりどころとなった「あの人」ならきっとこうしてくれるなどイメージしたりするだけで気持ちを立て直します。子供が「母など主な養育者」を心のよりどころにできない場合には、**学校の教員や周りの大人たちがその代わりになることが必要**です。



<乳児期>
「過度に警戒する子」や「妙になれなれない子」は、乳児期の発達課題『基本的信頼感』が十分獲得されていない可能性があります。特定の大人の安定した愛情ある接し方により「自分が愛されているという実感」を得ることで自分や他人を信頼することができ、「母など主な養育者」が子供の安全基地となります。

<幼児期> ~第一反抗期~
「我慢できない子」は、幼児期の発達課題『自律性』が育っていない可能性があります。「失敗して怒られるかも」と不安をもちながらも、「自分でやってみてできた」という体験が大切になります。また、「失敗を極端に恐れる子」「強迫的な子」は、厳しくしつけられすぎて、失敗を恥じる気持ちや自分の能力への疑惑が強すぎる可能性があります。上手にできなくても、自分でやろうと挑戦したことを認めて、しっかり褒めることが必要です。

<学童期> ~ギャングエイジ・第二次的性徴~
「すぐにあきらめる子」「面倒なことをコツコツ頑張れない子」は、学童期の発達課題、『勤勉性』が育っておらず、どうせだめだという『劣等感』が大きすぎる可能性があります。他者からの「よく頑張ったね」という、努力を認められる優しい言葉によって自信を付け、自己効力感を高めることができます。けんかしたり、失敗したりしても、気持ちを整理して次に立ち向かうという立ち直り体験を積み重ねることが大切です。

<青年期前期> ~第二次的性徴・第二反抗期・心理的離乳~
青年期前期の「反抗」は、この時期の発達課題『自我同一性の確立』が関係しています。親や教員が求めるものに違和感をもち「自分らしさを大切にしたい」「自分で決めたい」気持ちと依存せざるを得ない立場の中でのものがきです。これは「無気力」や「ニート」という形で表れることもあります。日常生活の中で、「男である自分、女である自分」「学生である自分」「アルバイト先の店員である自分」などいろいろな面で悩みながら、「自分は何者なのか、何ができるのか」と自分を見つめ、社会の中での自分の役割や価値を見出していくことが大切です。

乳児期・幼児期・学童期・青年期前期には、それぞれにクリアすべき発達課題（上記の『 』に示したものが、それぞれの発達課題です）があります。

- **<乳児期>** 自分の欲求がいつもすぐに満たされるとは限らないことに不満を感じつつも、それを上回る「自分が愛されている実感」を得ることで『基本的信頼感』が形成され、次の幼児期に進めます。
- **<幼児期>** 「うまくできるかな？」と自己への疑惑をもちながらも、自発的積極的に活動してみて「うまくいった」という体験をすることで自信が付き『自律性』『積極性』が形成され、次の学童期に進めます。
- **<学童期>** 学校での失敗や友人との競争の中で様々な傷付きを体験しますが、失敗を乗り越えたり、努力を大人に認められたりして傷付き体験を上回る自己効力感を得ることで『勤勉性』が形成され、次の青年期前期に進めます。
- **<青年期前期>** 甘えたい気持ちと自立したい気持ちの狭間でもがきつつ、あこがれのモデルを模倣して挑戦し、失敗しながらも自分にできることや自分らしさを見付けることで『自我同一性の確立』がなされ、次の青年期後期に進めます。発達課題をクリアしないと、身体的には成長していても、心理的にはつまずいた発達段階にとどまってしまう。

子供が成長とともに変化する様相と各発達段階においてどのような課題があるのかを理解しておくことが大切です

事例1 (小学校低学年)

小学2年生のA君は、友達のものでも欲しくなると取ったり、遊ぶ時に自分勝手なルールを作ったり、従わない友達に対しては叩くなど乱暴をしたりします。そのため友達とトラブルになることも多く、いつも担任が間に入って仲裁しています。授業中でも、隣の席の児童に話し掛けたり突ついたりし、注意されてもお喋りを止めないことがよくあります。

* 成長プロセスについて 「自律性」 — 「恥・疑惑」

A君の行動は自己中心的で周りの迷惑を顧みないということがあります。原因や背景はいろいろ考えられますが、その一つに幼児期の発達課題である「自律性」が十分身に付いていないということも考えられます。乳児期の赤ちゃんは自分では何もできず、周りの人に助けをもらわなければならないので自己中心的ともいえ、周りの大人は振り回されます。しかし、幼児期になりトイレトレーニングや他の児童たちとの関わりを通して、少しずつ自分の衝動をコントロールできるようになります。A君はそのような「自律性」の獲得が不十分で、乳児期の自己中心性が強く残っていると思われる。

そのようなA君への関わりは、単に叱責したり注意したりするのではなく、まず、なぜそのような行動になってしまうのかA君自身に振り返らせます。その上で、「友達はどうか感じるか」を考えさせ、そして、小学生として、「何が良くて、何をしてはいけないのか」を理解して行動できるよう、根気強く指導することが大切です。ただその際、A君がいつも怒られてばかりいると思うようになると、反省の域を超えて、自分を恥じたり、自分はだめなんだという気持ちになってしまいます（「恥・疑惑」）。ですから、直そうと努力したことや挑戦したことについてはきちんと褒めることも大切です。学齢期の児童たちは、小集団遊びや小グループ活動などの経験を通じて、友達の存在を認めたり、自己中心的な考えに気付いて修正したりしていくのです。

事例2 (小学校高学年)

小学5年生のBさんは、おとなしく目立たない児童で、みんなの後をついていくタイプです。授業では、答えが分かっている手も挙げる事がほとんどありません。担任に話し掛けられても、モジモジして黙っていることが多く、「どうしたらやる気を引き出せるか」と担任は考えています。

* 成長プロセスについて 「積極性」 — 「罪悪感」

Bさんは、年齢的には学童期ですが、幼児期の発達課題である「積極性」が十分に育っていないのかもしれない。幼児期は何でも自分でやりたがる時期ということがあります。大人のまねをしたり、自分で考えて遊びの工夫をしたりして、「自分がやる！」と盛んに自己主張します。大人が見ると、いたずらに思えることや危険なこともあるので、ときには注意や叱責が必要ですが、叱られてばかりだと「自分は大変なことをしてお母さんを悲しませてしまった」「やらなければよかった。自分は何て悪い子なんだ」と「罪悪感」が必要以上に強まってしまいます。その結果、積極性を求められる場面でも罪悪感がブレーキを掛け、「しない方がいいんじゃないか」と消極的になってしまいます。

大人は、まずBさんが「何をしたい(したかった)か」「どうしたい(したかった)か」を聴き、結果よりも自分で行動する(行動した)ことに目を向けて、褒めるようにします。次に、どうすれば成功できるかを一緒に考えながら、徐々に自分の力でやってみるように促し、「いいね」「大丈夫だよ」と励ましていくことが重要です。そして、Bさんが自分の役割を果たしたときや正解を導き出したときは、担任や保護者がきちんと認めて褒めることが大切です。一度褒められただけで積極的になることは難しいのですが、継続的な取組で少しずつ変容していくことができます。また同時に、大人のアイコンタクトなどに見守られながら、ごっこ遊びや集団遊びを通じた同年代の児童との交流の中で、社会性やルールを身に付けつつ、「自分で考えてうまくいった」という体験を重ねて自信を付けていくことで、罪悪感を乗り越え積極性を身に付けていきます。

事例3 (中学生)

中学2年生のCさんは、活発で勉強や学校行事にも熱心に取り組む生徒です。部活動では、代表選手に選ばれることを目標に励んでいましたが、ライバルに負けて代表からは外れてしまいました。その後、Cさんはしだいに学校を休みがちになりました。「学校のことを考えると頭やお腹が痛くなる」と言うCさんに、担任は保護者と相談して、しばらく様子を見ていましたが、Cさんは徐々に生活が乱れ、朝も起きられなくなってしまいました。

* 成長プロセスについて 「勤勉性」 — 「劣等感」

Cさんは頑張っていたにもかかわらず代表になれず、強い「劣等感」を抱き、負けた悔しさと恥ずかしさをうまく処理できなくなってしまったと考えられます。Cさんのようにつまずき慣れておらず、1回の挫折で大きく「劣等感」にさいなまれてしまう生徒もいれば、一方ではつまずき体験が多く、「どうせ、私はだめなんだ」と自信を失い、諦め癖がついてしまっている生徒もいます。

努力をしたのに結果が伴わず落ち込んでしまったときに必要なのは、周りの人からのねぎらいや頑張った過程を認めてもらうことです。代表選手に選ばれなかったとしても、「Cさんはよくやったし、別の〇〇も頑張っている」と認めてあげることです。勉強や学校行事への熱心な取組を、周囲が励ましたり認めたりすることで「自分にはまだやれることがある」と頑張り努力する気持ちが育っていきます。他者からの承認に支えられながら、コツコツと頑張り続けたり苦勞を乗り越えたりする「勤勉性」が、自己効力感の獲得につながります。

この時期、ライバルに運動や勉強で負けるという「傷付き体験」は心理的成長という点ではとても重要です。傷付きや劣等感を抱えつつも、家族や学校の一員としての役割を担ったり得意分野を伸ばしたりすることで自信を付け、「自分は困難を乗り越えられる」という自己効力感が生まれ、劣等感を克服することができます。そして同時に、「ライバルに負けた自分」が勝ったライバルや周囲の仲間はどう振る舞うかを通して、感情のコントロールや対人関係スキルを獲得していきます。

事例4 (高校生)

高校1年生のD君は、興味のあることには積極的に行動するタイプで、夏休みにはファミリーレストランでアルバイトを始め新しい友達もできました。その後、アルバイト帰りにその友達や先輩と遊ぶようになり、しだいに帰宅が遅くなり無断外泊もするようになりました。また学業にも身が入らなくなり、見兼ねて注意する母親に対して暴言を吐くことも多くなりました。

* 成長プロセスについて 「自我同一性の確立」 — 「自我同一性の拡散」

D君はアルバイトを通して世界が広がり、「働ける自分」「稼いで遊べる自分」にも気付いたことで、これまでの「素直な子供である自分」や「真面目な生徒である自分」から脱皮しようとしているのかもしれない。

大人としては大変心配な時ですが、アルバイト先の仲間を否定するような言い方や、無理にアルバイトを辞めさせるような行動をとるとかえって逆効果です。彼は今、その世界で知り合った仲間や先輩に憧れ、「この人のようにになりたい」と思っています。その中でいろいろな仲間や先輩の生き方を見ていて、学ぶことも多いのです。アルバイトをしながらきちんと学校を卒業したり資格を取って社会人となる先輩や、学校を中途退学して家に帰らなくなる仲間たちを見たりして、やがてD君も自分なりに「でも、自分にはこっちの方が合っている」「自分ならこうする」などオリジナルな自分を獲得し、自我同一性を確立していくのです。

大人は、頭ごなしに否定せず本人の考えによく耳を傾け、対話の機会を失わないようにし、「もしも失敗したら帰ってくればいい」と受け皿となってあげることが大切です。大人から見ると、現実的で賢い選択は、まだまだできないかもしれませんが、ときには必要な手助けをしながらも、大人の価値観を押し付けることなく、生徒が自分で選択・決定するのを温かく見守ることも、生徒が大人になっていくためには必要なのです。